

ふるさとエッセイ

# 郷土文化の担い手たち

3

宮崎県民俗学会会長 原田 解

## 隠れた歌物語

終戦というこれまでに体験したことのない出来事は、世の中にさまざまな混乱をもたらしたが、また一方で、これまでの束縛された暮のしから解放され、誰でも平和で自由な生き方が楽しめる、新しい時代への出発点にもなっていた。そのため人々はこれから社会がどう変わって行くかと、期待と不安の入り混じった目で見守っていた。

その中で、全国に先がけての「宮崎管弦楽団」の立ち上げという、画期的な取り組みだったため世間の反響も大きかったようだ。これはまた三つの幸運がもたらした「音楽の贈り物」でもあった。

その一つ目は旧満州国から宮崎市中に引き揚げてきた、園山民平という優れた作曲家の存在である。彼は戦前の「宮崎第一高女」で10

年間ほど音楽教育に携わった後、「大連音楽学校」を設立し、傍ら「満州国歌」の作曲などを手掛けている。こうした経歴を持つ人物が地元でいたからである。

続く二つ目の幸運は、昭和20年10月、アメリカの海兵隊が県内各地に進駐し、さっそく県庁内に「宮崎民政部」が置かれ終戦処理が行われた。

わが家でも父が大切にしていた日本刀を供出させられたので、その様子をしっかりと記憶に留めている。かたわら彼等は県民への広報

活動や教育改革に対しても積極的だった。長官は音楽交流に熱心で、手に入



宮崎管弦楽団を手がけた園山民平

り難かった楽器の募金活動にも協力を惜しまなかった。これもまた楽団の発足の隠れたエピソードだろう。

三つ目の幸運は昭和24年に開校した「宮崎大学」の初代学長となった高橋隆道である。彼は音楽についても造詣が深く、東京芸大のオーケストラを宮崎に招いて演奏会を開くなど、当時としては先進的な考えを持つ文化人で、また「学芸学部」に特設の音楽過程を設けるなど、その功績は大きな裏りを残している。こうした周りからの心温かいサポートが折り重なって、「宮崎管弦楽団」は産声を上げたのである。

進駐軍を巡ってはこんな「歌物語」が語り残されている。それによると県庁内に「宮崎民政部」が置かれた翌年の12月24日夜、クリスマスを祝う催しが宮崎市内で行われ、県庁の合唱団にもそれに参加するようにとの要請があり、「聖夜」や「もみの木」などを歌って歩いたといっことである。

# 作曲家 園山民平の存在

## 立ち上がった宮崎管弦楽団

# 「犬の戦士団」写真祭上位に

## 6/4 内倉真一郎さん(延岡)台湾で高い評価

延岡市で活動する写真家・内倉真一郎さん

(内倉写真館代表取締役)の作品「犬の戦士団」が、3月に台湾で開催された国際写真祭「WORLD PHOTO DAY 2018」でキュレーター賞を受賞した。

写真祭には世界各国の写真家600人が応募。書類選考が行われ、120人に絞られた中から内倉さんの作品は上位賞7人に選ばれた。

「犬の戦士団」は、延岡市内で飼われている犬がモチーフ。映画「猿の惑星」からインスピレーションを受けて撮り始めた作品で、犬の本能の一面が表現されている。約70点を出品した。

高評価を受けたこの作品は、同祭のメインビジュアルとして広報用の図録や看板、ポスターやパンフレットなどに使用され、内倉さん

は「名誉な」と喜んでい

る。9月1日からは受賞に伴った個展が台湾台北市の「G.Gallery」で開かれる。内倉さんはこれからも、仕事と両立しながら延岡で作品を制作していきたいと話していた。

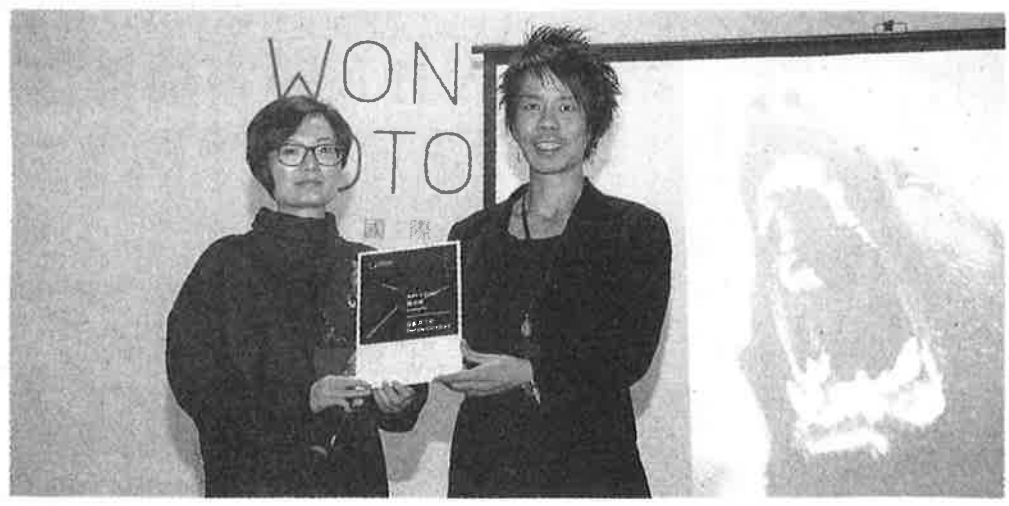
また、7月13日から東京・南麻布のEMON Photo Galleryで個展「十一月の星」を開催。同ギャラリーが主催した公募展でグランプリを獲得した作品「B.A.B.Y」と、新作約30点が

展示される。受賞作は、息子に被写体に命の原始的な行為や本能を切り出した

作品「犬の戦士団」は写真祭の広報用メインビジュアルとして大々的に展示された



作品。個展名は、11月生まれの内倉さんの息子にちなんでつけたという。



キュレーター賞を受賞した内倉さん